

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語の歴史的研究：
対訳辞書の訳語にみる近代日本語のすがた

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 貞雄, 中山, 典子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003326

日本語の歴史的研究 —対訳辞書の訳語にみる近代日本語のすがた—

山田 貞雄 (言語変化研究部第2研究室)

syamada@kokken.go.jp

中山 典子 (言語変化研究部第2研究室)

nakayama@kokken.go.jp

要旨： 明治初期刊行の英和辞書を資料として、漢語訳語の網羅的調査結果の電子化モデルを作成し、分析を可能にした。また、フリガナつき対訳訳語資料『英和字彙』の訳語について網羅的調査と分析をすすめた。

キーワード： 国語史 表記 対訳資料 英和辞書 訳語 漢語

1. 研究の目的

幕末から明治20年代末までに成立した、英和対訳辞書約30種を用いて、訳語としてどのような種類の語が使われたか(語彙)、どのように書かれたか(表記)、どのような場面で行われたか(意味)を調査し考察する。またそのための電子化資料を作成する。

2. 研究の意義

そもそも、日本語の中で、語史の完全に記述できる語彙がどれだけあるだろうか。国語辞典や漢和辞典で語義を分けて説明しているもののうち、その語の意義分類が歴史的にどう変化してきたのか説明のあるものは少ない。また、表記の変種や、表記の変遷と意義範疇との関連に言及するものもわずかでしかない。

例えば、「問題」という漢語は、解答をもとめる設問、という意味と、研究や議論の対象、ひいては厄介で面倒なこと、といった意義との両方で盛んに使われる。後者

は「社会問題」や「問題化」といった熟語を多く派生させる。例文として「入試の問題を引き裂いた問題行動」といった、同一文脈に同一語を別語として(異なる意味で)用いても不自然ではない。その両義ともが一般的な現代日本語の用法といえよう。ところがそれらの語義用法の歴史の変遷は十分に明らかではない。

また、例えば、言語学者、亀井孝が遺した問いかけ、「間違いなく、必ず確かに」の「きっと」(「明日はきっと雨だ」と、少し古くは「すばやく、すぐに」(「きっと参れ」)、現在では「さっと、きりっと」(「きっと振り向く」)の「きっと」、そして「屹度」「急度」などの表記の変種と意味用法の関係、は未だに存分に解き明かされていない。

このように、日本語の個々の語史の探究の積み重ねや総体が、日本語の歴史的研究の一面(一つの切り口)であるといえる。普段何気なく用いている日本語の意味、表記の歴史を研究することは、具体的には、

できる限りの留意をもって語彙資料を観察し、用法を吟味することでもある。

当研究は、現代日本語に直結して歴史的变化を示すいわゆる近代語、すなわち西歐文明の接触・摂取を果して近代化をすすめた明治期の日本語の、歴史的研究を意図している。その中でも、現代日本語の多大の部分を担当している漢字語（漢字文字列の語）の歴史を、対訳辞書に用いられた漢語訳語に対照を絞って、明らかにしようするものである。

3. 調査研究の内容

(1) 明治20年末年までの英和辞書29種における、英語抽象名詞見出し300語についての漢語訳語の網羅的調査結果に基づき、パソコン上のデータベースを構築した。英語見出し語の別にかかわりなく、訳語を構成する漢字文字列の各単字による検索、漢字異表記文字列の参照などの関連づけ操作を実現し、考察をすすめた。

(2) 英和対訳辞書『英和字彙』初版における、フリガナつき日本語訳語の網羅的調査を行い、サ変動詞の種類と用法、語彙の清濁、フリガナと漢字文字列の関係、フリガナに用いられている日本語の位相などについて分類・考察を行った。

(3) 英和対訳辞書『英和字彙』初版および再版（実質上の3版）との間のフリガナの異同の調査を試み、訳語として用いられる日本語の観察・考察をおこなった。

4. 研究室公開内容

- (1) 言語変化研究部第二研究室の沿革
〔資料展示〕
- (2) 明治前期英和辞書における日本語の歴史的研究
〔データ紹介デモ〕
- (3) 『明治文庫目録』
〔改訂作業解説デモ〕
- (4) 『漢語和解一覽』（明治10年）
〔展示〕
- (5) 『今度心得刑法中違警罪図解』（明治12年）ほか
〔展示〕